

24 宋大仁が三木栄にあてた1通の手紙で得た励まし

郭 秀 梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

2008年のゴールデンウィークに故三木栄氏の旧居を訪ね、現存資料を調べて念願を果たし、一生の思い出となった。多量の書籍や遺稿および書簡・葉書に接し、宝物を見つけるような期待感で深夜まで調査していたところ、一通の黄変した手紙に目をひかれた。それは中国の宋大仁より三木栄にあてた手紙である。封筒から出して見ると、「中国衛生史研究会」の公的便箋にこう書いてあった。

三木栄医学博士閣下。我会是医学研究团体，搜羅有関医史図籍。頃聞大作『朝鮮医学史及疾病史』出版，内容豊富，敬懇惠贈壹部，以供参考。我会願以『中国医業八傑図』壹冊，及『中国偉大医業家画像』掛図二十四幅奉贈，亦投桃報李之意也。当希勿却，並盼示復，為荷。此致敬礼。宋大仁。1962, 5, 2

宋氏は三木氏の『朝鮮医学史及疾病史』をたたえて研究会の参考書用に一冊寄贈を求め、代わりに自著『中国医業八傑図』などを贈呈するという内容である。実際に相互寄贈されたかはさておき、当時すでに本書が中国でも注目されたことが分かる。

宋大仁(1907-1985)は近代中国の医学家・史学家・画家である。本籍は広東の中山，マカオで生まれ，名は沢，海煦・医林怪傑と号した。1933年に消化器疾患の研修で来日し，日本消化器病学会の会員となる。1935年，上海で中西医業研究社を設立し，常務理事および医史委員会主席に任じられた。富士川游が影印出版した『医籍考』を自己資金で購入し，中国での再影印出版に多大な貢献を果たしている。

宋氏は湯島聖堂に安置される神農刻像の由来究明にも関わっている。というのも湯島聖堂の神農像には，入宋した奮然の将来品という説がかつてあった。斯文会(湯島聖堂)の解説によると，当説を確認するため矢数道明氏は中国の関係方面研究家に写真を送り，調査と意見を求めた。その結果，『宋史』列伝ほかに奮然や神農像将来に関する記録がないこと，また宋代の作品と断定するのは困難だが，背扉に何らかの記録があるはずとの示唆が寄せられた。そこで矢数氏が1984年，斯文会とともに神農像の背扉を開き，その裏面の墨書から神農像は家光の発願で作製されたことが知られたのである。矢数氏の『漢方略史年表』には，「昭和59年(1984)8月11日，中国広州医史博物館顧問，宋大仁教授の要請により，湯島聖堂恩賜神農像の鑑定のため祭祀の後，前面，後面，側面，背面の扉を開いて，その全貌の撮影を行った」と記されている。つまり前述の「中国の関係方面研究家」とは，宋大仁氏なのである。

本題に戻りたい。三木氏の『朝鮮医学史及疾病史』は初めて体系的に朝鮮医学史を研究した書のみならず，その集大成ぶりは空前絶後と評している。本書を開くと，総序にある「不通朝鮮医学，不可以説日本及中国医学」という自信に満ちたことばに心を打たれる。これを中国文で記したのは，漢字文化圏の研究者に広く発信する意図があったからにほかならない。三木氏は中・日・朝三国の資料を駆使し，かつて日本に輸入された大陸医学は朝鮮化されており，朝鮮半島が重要な架け橋だったことを一貫して繰り返し強調する。本書を通読するなら朝鮮医学史のみならず，中・日・朝三国およびアジア医学交流史の集成であることが分かるだろう。

この名著が世に問われてすでに半世紀あまりを経たが，影響はアジアの医史学界全体に及んでいない。「學術の盛衰，まさに百年の前後に升降を論ずべし(學術盛衰，当于百年前後論升降焉)」，と清の学者・阮元が記したとおりであろう。近年，筆者はさまざまな機会に医学界や史学界の研究者と交流し，そのたびに三木氏の著作・業績ばかりか，氏の存在自体ほとんど知られていないことを痛感している。そこで僭越ながら『朝鮮医学史及疾病史』の中国語訳を決意した。各氏の助力があって宋氏の三木氏宛手紙を見いだしたが，これに励まされ今後も三木氏が築いた学問の顕彰に尽力したい。